



### ～新型コロナウイルス～リバウンドに警戒を～

京都府に発出されていた緊急事態宣言が9月30日をもって全面解除されました。

流行「第5波」は急速に落ち着き、京都市内の新規感染者数は8月下旬のピーク時から10分の1に減少し、全国的にも同様の傾向にあります。

感染者が減少した理由は、ワクチン接種の進展や危機意識の向上などが挙げられていますが、専門家の間でもはっきりとわかっていません。

当法人の施設では、職員、職員の家族、利用者及び利用者の家族で、PCR検査を受けられる事例が先月9月は8件（8月：23件）あり、累計で134件となりました。

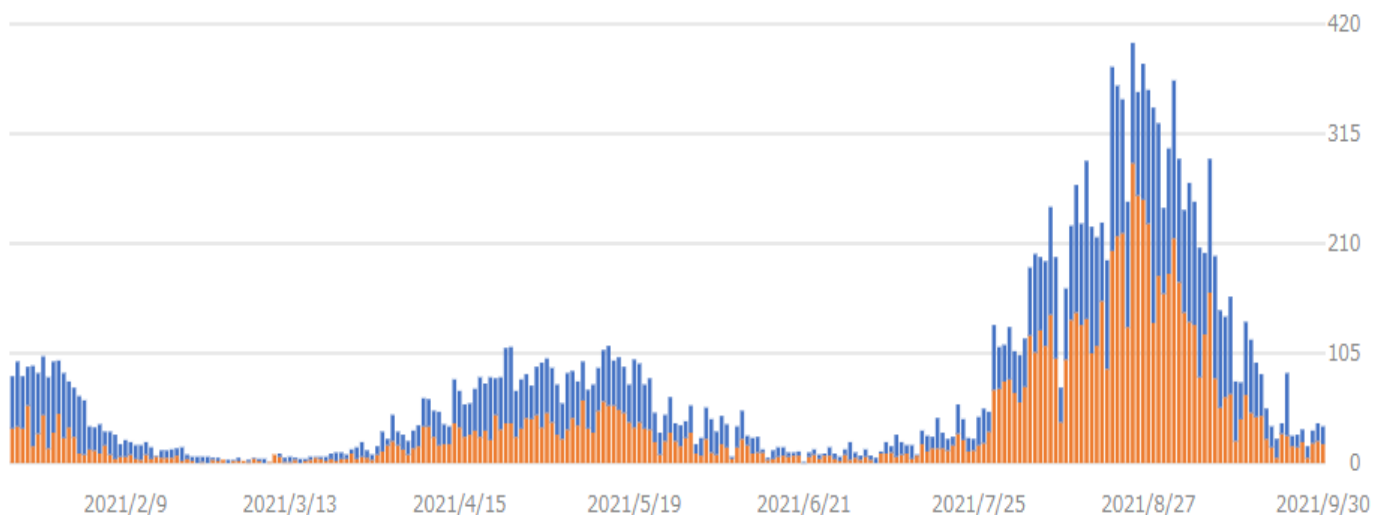
内1件では、利用者さんが併用利用する他法人の施設でクラスターが発生し、当法人施設でもその関連で利用者さん2名の陽性が確認されました。一連の疫学調査の結果が判明するまでの間、当該施設では、通所自粛を要請するなど、利用者さんやご家族に多大なご迷惑、ご心配をお掛けすることとなりました。

感染状況が落ち着いてきたとはいえ、これまでのコロナ対策では解除とリバウンドが繰り返されてきており、「第6波」への警戒と備えが必要です。

職員の皆さんにおかれましては、引き続き、マスク、手洗い、距離確保、三密回避をはじめとする日々の感染対策、利用者、職員の健康状態の把握など基本的な対策の徹底をお願いします。

京都市内の感染者数（日別）

凡例（青：感染経路判明分、橙：感染経路不明分）



（本部事務局）

# 洛南エリアTOPICS 【洛南身障会館：多機能型事業】

## \*洛南会館ふうせんかずら成長記



洛南会館では、事務所横にある花壇に季節を感じられる草花を植えています。

これまで、春～夏にかけてはきゅうり、ゴーヤ、ひまわりなどを植えてきましたが、今年初めて『ふうせんかずら』という植物を育ててみました。

### 6月下旬

ふうせんかずらの種を丁寧に植えていきます。ちゃんと芽が出てくれるかな。

種は「あすなろ」から頂きました。



### 7月上旬

無事に芽が出ました。花壇一面が鮮やかな緑の葉でいっぱいになりました。



### 7月中旬

夏の日差しをいっぱい浴びてすくすく成長。ネットにもツルが巻き付き始めました。



### 8月中旬

あっという間に窓の上まで伸びていきました。ふうせんかずらの特徴でもある、種が入った風船のような袋もたくさん出来ています。



### 9月中旬

茶色く色付いた風船袋を収穫。中身を取り出してみると、ハートの形がくっきり入った、可愛らしい種がたくさん採れました。ご利用者の方々も、ハート形を見て「すごい!」「かわいい!」と感想を話されていました。



コロナ禍によって洛南会館でも行事の中止や活動の制限が続く中、生活のメリハリや楽しみを感じられる機会が少なくなっていると思う事もありますが、出来る範囲で日々の小さな楽しみや喜びを感じて頂けるような取り組みを、これからも考えていきたいと思えます。

(種がたくさん採れましたので、ご希望の方は会館までお問い合わせください★)

(京都市洛南身体障害者福祉会館 多機能型事業：小出 将也)

## トイレ清掃はじめました！

今年4月より伏見総合福祉センターの1Fのトイレの清掃を始めました。



授産所で始めるに当たり、先行して職員で作業を行い、どのように清掃していくか清掃マニュアルを作成しました。

また、清掃道具も一新し、トイレが清潔になり清掃がしやすくなるよう準備をしました。

センター内の仕事であり、今まで施設外で清掃作業をされていた利用者さんだけでなく、それ以外の方も参加し、出来る部分の清掃に携われるようにしました。

実際に清掃に携わっている利用者さんの声としては、「自分が使うトイレなので汚さないよう使っていきたい。」「トイレ掃除をするようになり以前よりトイレがきれいになった。」「まだ部分的にしか携わっていません、出来る作業範囲を広げて色々して行きたい。」などの感想を持たれていました。



以前のトイレと比べて、匂いや空気が良くなったといううれしい言葉を聞くと、作業に対するモチベーションも上がり、利用者、職員が毎日一生懸命清掃を行っています。



伏見総合福祉センター1Fトイレは、利用者、職員だけでなく色々な方が使われる場所なので、今後も衛生面にもしっかり気を配りながら、作業に取り組んで行きたいと思います。

(京都市伏見障害者授産所：安藤 武)

# 山科エリアTOPICS 【放課後デイすてーじ】

## スクラッチアート創作

新型コロナウイルスの感染が拡大しているために外での活動を減らして、室内での活動を中心に利用者の方が楽しめるよういろいろ工夫しながら過ごしています。

今回は8月に作ったスクラッチアートを紹介します。初めにクレヨンで画用紙いっぱいに色を塗っていきます。その後に専用の黒い液を上塗りして乾かします。乾いたら竹串で削っていけば最初に塗ったクレヨンの色が浮かび上がってきて完成になります。今回は夏に取り組んでもらったので「花火」をイメージしながら作っていきました。それぞれ個性のあるとても綺麗な作品に仕上がりました。



完成した作品は東野センター2階廊下に飾っています。

(放課後等デイサービス すてーじ：溝内 脩平)

## ノーマルな生活を地域で。

先月9月の「支援センターNEWS」では、障害者基本計画から見える障害者入所施設のあり方について下記のポイントをお伝えしていました。

- ・入所施設は真に必要なものに限定する。
- ・地域福祉への理解の促進が必要。
- ・入所施設は地域移行形態として、グループホームや一般住宅への移行を促進していく。

その上で「入所施設もグループホームも空きがない中で、高齢になっていく利用者も含め、法人としての方向性を皆さんと共に考えていきたい」と先月担当の「らくとう」山下主任から問題提起を頂きました。

今回はその内容を受け、私が考える支援の視点を我が法人の理念に引き寄せ、深掘りしながら述べていきたいなと思っています。

ケース対応をする中で、「この人は地域では無理」「地域が無理だと言っている」「うちでは対応ができない」「なので入所施設しかない！」と言う支援者と出会うことがあります。そういった声を聞かたびに「もう少しできる方法を関係者で考えてみませんか」と伝えますが、何かあったら入所施設！という当事者の気持ちから解離した考えに囚われる支援者に、自分たちの仕事はまだまだだな…と自身を振り返り残念な思いを募らせたりします。



ノーマライゼーションの父と呼ばれている「ニィリエ」は、入所施設を訪問する度に劣悪な環境下を目の当たりにし、入所施設の「保護された退屈な環境」「刺激や影響を受けられる環境で発達する機会を奪っている」という問題点、その環境から被られる「後天的な発達の遅れ」が「敗北主義的な認識を引き起こす」、そして「退化させているところなのだ」と痛烈に批判しています。

下記3点は「知的障害者の発達の遅れの問題は以下の3つの組み合わせだと考えている」とニィリエが定義したのになります。

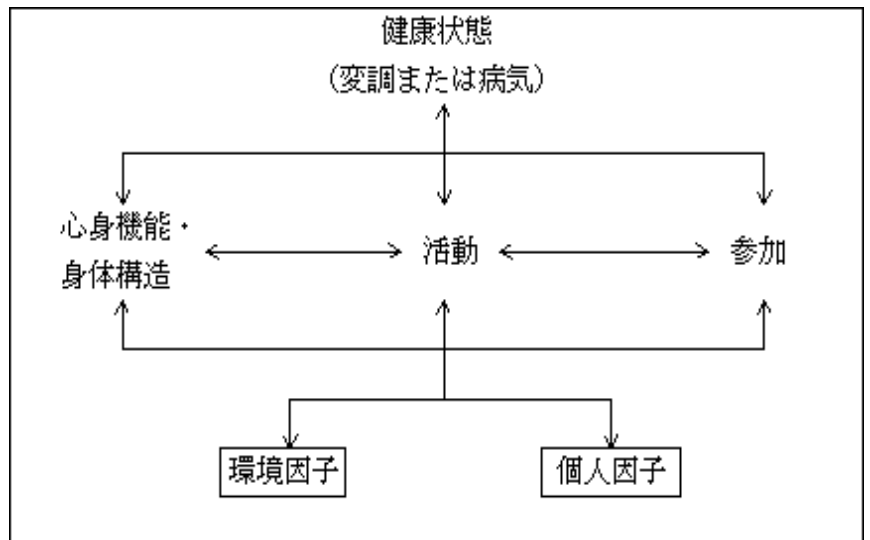
1. 個人の知的な発達の遅れ…適切な行動を行う際の機能障害に関連した認識上のハンディキャップ、学習困難性、繰り返しの新しい経験や複雑な状況がもたらす要素を満たす事の困難、失敗ゆえのフラストレーション、我慢できないがゆえにしばしば悪化するコミュニケーションの能力の欠如。

2. 押し付けられた後天的な発達の遅れ…行動の上で機能不全や機能低下として表現され、本人の周りの環境や社会によってつくられた生活状況の中での欠陥の可能性や、両親や職員、一般人の不満足な態度が原因である。施設環境の貧弱さや、教育や職業訓練が存続していないか不十分であること、経験や社会的な接触の不足、…等々が元々のハンディキャップの上に付け加える。

3. 自分がハンディキャップを持っているという認識…歪められた自己認識や防御規制、内面の問題を閉じ込めることや、敗北主義的な認識を引き起こす可能性がある。自分や他人の目の前で自己主張することは、多くの一般の人々にとっても難しいかもしれないが知的があると認識し、自分自身を理解することができないと認識しなければならないときには、自己主張というタスクの達成はほとんど不可能になる。

ICF 中の「背景因子(環境因子・個人因子)」と当たる部分にもなるですが、ニリエは「2.」「3.」の部分について、閉じられた入所施設の中では強く作用するとしています。

ただ「入所施設はだめなもの」ではなく、制度の変遷から個別支援の視点として「日中活動の場」と「くらしの場」が離れた事、計画相談の導入からより個別性の高い支援が届きつつあのではないかと感じています。でもそれでも、「自分は入所で生活できるか？」と問われると、やはり「嫌だな」と答えてしまいます。



私がこの法人に就職を希望したのは、地域生活を支える事を理念として掲げている事でした。

私達法人の理念は「障害のある人とその家族が地域の中で尊厳を保ちながら普通の暮らしができるように支援する」としています。

「地域の中で」と「普通の暮らし」がポイントなのですが、普通の暮らしって何なのでしょう。

私は、普通の暮らしって人それぞれやろ、と思っているので、普通の暮らし=千差万別の暮らし。つまり個人それぞれで「多様な暮らし」と捉えています。

地域の中で「多様な暮らし」を支援する。とても素敵な事だと思っていますが、やはり支えるには人や物など沢山の資源が必要な事を支援センターの職員としてひしひしと感じています

生活介護に空きがない、ヘルパーで穴埋めようとしても人手不足…。人がいても、行動障害などで対応が難しい。しかも他者、地域住民に迷惑がかかるかもしれない…。そんな状況が続くと、入所施設に入る事ができたらいいのではないかと…とってしまう事も仕方ない事かもしれませんが、ではそこからどう考えたらいいのか。私達はどのように捉えたらいいのか。

まずは、①何が足りないのかを考える事。そして②どうしたらその足りない部分を補えるのか。

①は、個々のケースに関わる中で見えてくる事ですが、その人の生活全体を見ようとしないと見えない。その人に何が起きているのか、何を希望しているのか。「希望」という点では、昨今「意思決定支援」という言葉や考えが出てきていますが、これは情報がなければ意思を形成できない事が前提であり、誰しもが同じ事がいえます。豊かな暮らしにするためには沢山の経験が必要になるため、豊かな支援を提供するという事を私達には求められています。

そして②。足りない部分をどうしたら補えるのか。制度で担える部分(②-1)と担えない部分(②-2)。

②-1の部分では、不足しているサービスは沢山あります。中部圏域では医療的ケアや強度行動障害に対応できる事業所が不足しています。通所居宅ともに不足していると感じています。

我が法人に限っては、通所系の事業所「日中活動の場」の資源は多いですが、「くらしを支える場」の支援(居宅・GH等)は少ないように見受けられます。

個人的な見解にはなりますが、「くらしを支える場」の支援は、当事者の生活が詳しく見え、その人の「個」が見えてくる。「個」が見えてくると、多様な暮らしも理解でき、その手立てを考える必要性が出てくる。同時にさらなるニーズが見え、環境へのアプローチへの必要性が理解できる、のではと思っています。「くらしを支える場」の支援は、我が法人に必要な事業だと考えています。

②-2では、制度では担える事ができない部分をどのようにアプローチするのか。

制度の狭間や限界は常につきまとう事。障害福祉の歴史の中では、インフォーマルな支援を行う中で制度が追いついてくるという歴史があります。ですので、まずは一事業所でできる幅を広げていく事。一事業所でできなければ複数の事業所で幅を広げる方法を考える事(協働)。プラス、地域のインフォーマルな資源にも目を向け、地域と関わる視点を持つこと。

今年の「らくなん」の目標は「キャパシティを広げる事」を掲げています。また、地域への視点という事で、今年「南区プラットフォーム推進事業」というネットワーク事業をはじめました。これはいつかの事業所と南区社会福祉協議会、行政の協力を得て行う事になりましたが、様々な事業所との協力形成ができる事で困難な課題をも共有し、当事者の地域生活を支えていく取り組みとして実現していく事を期待している所です。

長々となりましたが、以上私が思う支援の視座・視点となります。

当事者性と法人の理念、そしてソーシャルワーカーとしての使命として、地域での生活をいかに実現できるか、常に問い続け考え続ける事、言語化し、そして動いていく事が大事なのではないかと最近そんな事を考えています。

(京都市中部障害者地域生活支援センター「らくなん」:大塚秀樹)

# 社会福祉法人 京都府共同募金会様より、感謝状を頂きました。

今年も10月1日から、共同募金運動が実施されます。

また、各施設で募金を集めさせていただきますので、その際にはご協力をお願いします。



## 共同募金とは

共同募金は「社会福祉法」という法律をよりどころとして、国や市町村でなく、「共同募金会」という民間団体の活動によって行われている募金です。

寄付金は、京都で集められたものは原則として京都で使われ、私たちのまちの福祉活動を支えて、誰もが幸せに暮らせるまちづくりのために使われます。

## 当法人の募金実績

平成29年度	75,093円
平成30年度	43,185円
令和元年度	34,576円
令和2年度	51,030円

## 共同募金会よりいただいた助成金実績

平成29年度	800,000円	いたはし学園	車両購入費助成金
令和元年度	1,300,000円	ふしみ学園	車両購入費助成金

(本部事務局：下井修司)